



TITLE:

キャナンの富の概念に就きて(一)

AUTHOR(S):

石川, 興二

CITATION:

石川, 興二. キャナンの富の概念に就きて(一). 経済論叢 1920, 10(1): 65-77

ISSUE DATE:

1920-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127614>

RIGHT:

京都帝國大學經濟學會 經濟論叢

第十卷 第一號

大正九年一月一日發行

論 說

温情主義と勞働問題……………

法學博士

田島 錦治

手數料決定上の二問題……………

法學博士

神戶 正雄

モリスの文明觀と藝術觀と勞働觀……………

法學博士

河田 嗣郎

所帶統計概説(二完)……………

法學博士

財部 靜治

キヤナンの富の概念に就きて(一)……………

法學士

石川 興二

時事問題

智識階級の解散……………

法學博士

戸田 海市

朝鮮の財政獨立に就て……………

法學博士

小川 郷太郎

雜 錄

生活費の組織的研究の必要……………

法學博士

山本美越乃

判任官生活の實狀……………

法學士

汐見 三郎

獨逸大銀行の取引所仲立業に就きて……………

法學士

大森 研造

我國に於ける新ブルジョア階級の成立(二完)……………

法學士

圓谷 弘

カンニングガム博士逝く……………

法學士

本庄榮治郎

京都帝國大學經濟學會第一回講演會記事……………

キヤナンの富の概念に就きて (一)

石 川 興 二

序

『富』なる概念は、經濟學上最重要なる根本概念でありながら、而も由來甚だ異論多きところのものである。

茲に余は、Edwin Cannan の富の概念に就いて、述べんとするのであるが、余が特に、彼の富の概念を論せんとするは、以下の理由より深き興味を覺ゆるからである。(第一、キヤナンは現代經濟學界に於ける第一流の學者であり、又甚だオリデナリテイに富む人であつて、而も彼はこの『富』の概念なるものを大いに重んじ、彼の經濟原論と見るべき最近の著書には、『Wealth』なる語其ものを以て、その書名とし、其全十九章の中第一章を全部此概念の論に當て、居り、又彼の名著たる “Theories of Production and Distribution” に於ても亦全九章の中、第一章を總て此論に當て、居ると云ふこと。(第二、斯くの如くなれば、彼の富の概念論は、其研究頗る深きものであること、又 “Wealth” の中に於ける『富』の概念に對する彼自身の見解は、頗る獨創的なものであり、またサゼンシブなものであつて、我々に教へるところが、少くないと云ふこと。(第三、且此富に對する彼獨特の見解は、“Wealth” と云ふ書名を冠したる程に、彼の經濟原論其ものに特徴を

(1) 本書の邦譯本年十一月伊藤眞雄氏によつて出版された。

與へてゐるものであつて、彼の富の概念論は、普通に見られる單なる概念論とは趣を異にしてゐるといふこと。(第四)彼の富の概念に對する眞意は、その解答が獨創的なことゝ、彼の常として其論述が簡潔且深遠なることゝの爲めに、直に明らかにせらるゝが如き性質のものではなく、従つて讀者がそれを明かならしめんが爲めには、自己の見解に訴へる必要が大であると云ふことゝである。

斯くして余は、先づ第一に、彼が「Wealth」に於て述べたところを主として、余の解する彼の富の概念の眞意を闡明し。第二に、彼の此概念の特徴が彼の經濟原論たる「Wealth」の全體及其他の彼の學說に、如何なる特徴を與へたるかを論せんとするのである。

第一段。キヤナンの富の概念

先づ彼が富(Wealth)の概念を定義する立場を一言せねばならぬが、彼は經濟學は、Production of Wealth 及び Distribution of Wealth 等、Wealth (富)に就いて研究するものであると云ふ意味に於て、『富』(Wealth)を經濟學の主題として定義せんとするのである。

彼は先づ經濟學の主題たる富は、「undoubtedly, something possessed or enjoyed by human beings.」(疑ひもなく人間によつて所持され又は享受せらるゝ或もの)と云うてゐる。されば余は解し易からんが爲めに、彼の此富の概念を其物體たる『Something possessed or enjoyed』と其主格たる『By human beings』との二段に分つて、明かにしやうと思ふ。即ちこの二者に對する彼の論結、及論結

に對して彼の理由とするところを、余の理解するところに從うて明かにしやう。

其一。人間によつて (by human beings) の富たることなり。

先づこの富の主格たる『human beings』の富たることについては、彼は human beings generally であるとするのである、更に詳しく云へば、經濟學の主題たる富の概念は、社會全體の富をも、亦社會の内部の階級又は個人の富をも意味するのである。⁽³⁾

然らば其理由とするところは如何と云ふに、彼はこれに對し以下の如くに述べてゐる。即ち經濟學が獨立の學問となつた當時には、經濟學者は直に國民の富に關する論議に没頭して、國民以外の團體に關しても亦研究すべきか否と云ふ事を明白に考へるに至らなかつたので、現に Steuart は其著の題目中に『Political Economy』と云ふ語を用ゐ、又アダム・スミスの如きも『The Wealth of Nations』と云ふ語を用ひてゐる。かくて Political 又は Nation などと云ふ語により、一見斯學の研究は國民の富に限らるゝが如く見ゆるが、事實上に於ては然らずして、總べての經濟學者は、社會全體の富と共に、社會内の階級及個人の富をも考察して居り、從て又これらの語も經濟學の研究を國民の富に限らんとしたるものとは考ふべきでない、と述べてゐる。

其二。所持又は享受せらるゝ或もの (Something possessed or enjoyed) と云ふことなり。

次に此富の物體たる、『Something possessed or enjoyed』と云ふ事を限定しやう。さすれば前段の論明と相俟つてキャナンの富の概念が全體として明かになるわけである。

(3) Wealth. p. 2. 參照

先づ此の富の物體性に關する彼の眞意を、一言に云ひ表せば以下の如くである。『富』は in a particular length of time に於て commodities as well as services から享受せられる Utility or Satisfaction なり。即ち或期間に於て貨物並に勤勞より享受したる満足であると云ふのである。

茲に彼が Utility と云ふは、所謂人間に役立つ外物の性質又は働きと云ふが如き外界に止まつてゐるものにあらずして、Satisfaction と同様に外界の物より享けたる人の内部の状態を、意味してゐるのである。彼の語を以て云へば、"a particular state or condition of human beings" (人間の或状態又は有様) である。此點に彼の富の概念の根本的特徴があるのである。而して彼はこの點を大いに重じ且つ力説し、Wealth なる語の本源の意味はこの state or condition を意味したものであるとして、其ことの立證に努めてゐる。『本來普通の英語に於ける富なる語は、人間の狀態又は有様を稱したものである。此の事はかの祈禱書の中にある "Grant him in health and wealth long to live;" (彼をして健康と富との中に長生せしめ給へ) と云へる國王の爲めの祈禱に於ても示されて居る。此なる接尾語は、狀態又は有様を示すものである。従つて Wealth と云ふ語は、恰も health (健康) なる語が病の癒へたる又は病に罹らざる有様を、示したるが如くに良好なる、又は今日の英語で云へば一榮ゆる (prosperous) 狀態又は有様を示したのであつた。⁽⁴⁾』と彼は云うてゐる。"Theories of production and Distribution" に於ても富の (Wealth) は本來は身心の或狀態を意味したものである』と云つてゐる。『然るに時の立つに従つて、この語はそれを支配する事が、人を Wealth の状態に生活せしむるところの貨幣及他の具體的の物體に、適用せらるゝことゝなつ

(4) Wealth. p. p. 2-3.

(5) Ibid. p. 1.

たのである』と云うてゐる。而して彼はこの古の意味に『富』の概念を還さんとするのであつて、云はゞ、客觀的な『富』の物體を主觀化せんとするのである。『富』の概念の主觀化、こゝに彼の『富』の概念論の根本的特徴があると共に、また吾人が大いに味ふべきものがあるのである。此事については、後に又述べる事とするが、要するに、それ故彼の富の概念に於ては、普通に富とせらるゝ外界のものは單に富の手段であつて、富そのものではないのである。即彼の語をかりて云へば、regarding these commodities and services as the means to an end rather than an end in themselves (貨物や勤勞は、それ自身目的であると云ふよりは、寧ろ目的に對する手段として考へらる。)である。

富の物體性に關する彼の論旨を明かならしめんが爲めに、二段に分ちて論じて行く。即ち(A)に富の概念に關する『時』の觀念につきて述べ、(B)にこの彼が『富』の手段であると考ふる外界のものに就きて述べ、(C)に何故に彼は、『富』は此外界の物そのものではなくして、この外界のものを手段としてそれより得らるゝUtility or Satisfactionでなければならぬとするかと云ふ理由を論明しやう。(A)、富に關する『時』の觀念を更に二段に分つて論じやう。

(i) 先づ彼の意見に依れば、富の概念には、必ず時間の觀念が缺く可らざるものであると云ふのである。其理由は經濟學の論説は、多く富の分量の増減に關するものであるが、物の分量の増減と云ふ事は、『時』に關係なしには、假令一見理解し得るか如く見ゆるも、事實理解し得られないからである。例ば、單に「麵麴が増加した」と云ふ全く時の關係を離れた命題は、單に「雨滴が

(6) Wealth. p. 3.

(7) Wealth. p. 12.

増加した」と云ふ命題と同様に、それだけでは、到底事實上理解し得ないのである。普通時に關係なき命題を解し得ずとしないのは、其文の前後の關係より、それが一時點に關するか、又は期間に關するかを明かにし得るからである。⁽⁸⁾と云ふのである。茲にも彼の鋭さが閃いてゐる。

(ろ)に其『時』は期間でなければならぬのである。而して其理由は以下の如き、彼の論述に於て見られるのである。(イ)彼は論して曰く、『富』の概念に關する『時』の觀念が或一時點を意味するか、又は期間を意味するかは、初めは不明瞭であつた、而して此の爲めに非常な混亂に惱された。然し經濟狀態が幼稚であり程又貧しくある程、人々は或一時點に於て所持するものにつきて考ふるものであるが、之に反し文明國に於ては或期間内に得らるべき富の考へが、全く一時點の富の考を排斥してしまつてゐる。⁽⁹⁾經濟學史上に於ても、初めは富を明かに時點に關して用ひたことがあるが、⁽¹⁰⁾十八世紀の中頃以後に於ては多くの經濟學者は、事實上後者の意味に用ひてゐると云ふのである。⁽¹¹⁾(ロ)以上彼の云へるところは、直接物としての富についてであるが、人間の狀態としての彼の『富』の概念も、亦同く期間に關するものなることは、以下のことより明である、即ち彼は前掲の『生産及分配の學說』に於て、人間の生命を支へる財の豊富と云ふ事は、明かに一時點に於ける物の堆積の量に關係するものではなくて、絶えざる財の生産、即或期間に於けるものに關係するものであると云ふてゐるが、⁽¹²⁾此ことを、經濟學の根本問題は、人間の生計(well off or ill off)の研究なり、とする彼の見解に、⁽¹³⁾照合して見れば、人間の狀態を意味せんとする彼の『富』の概念に於ても、其『時』の觀念は期間なる事が明かである。又第十三章に於て個人の所得と個人の富の關

(8) Wealth. pp. 3-4. 參照

(9) Wealth. pp. 4-5.

(10) Theories of production and Distribution p. 14.

(11) Wealth p. 5.

(12) Ibid, p. 15.

(13) "Theories of production and Distribution" p. 14.

係を論ずるところによるも、此事は明かである。例へば或期間の *Wealth or material welfare* と云ふ様な意味の語を度々用ゐてゐるのである。

かくて富の概念には、『時』の觀念が必要であり、しかもそれは期間であることが明になつた。

(B) 次に彼の『富』の *means* (手段) たる外界のものにつきて述べねばならぬが、これに就いて、彼の主張するところは、それは貨物 (*commodities*) のみではなくて、勤勞 (*Service*) をも含まねばならぬと云ふのである。

而して其理由として彼は次の如くに述べている。即ち、所謂生産的勤勞 (*productive labor*) も不生産的勤勞 (*unproductive labor*) も其生産するところは共に效用であり、社會の人々が生活の便宜又は快樂を得る資源である。故に生産的勤勞の結果たる物質的のもの即ち貨物を、年々の生産物とするのならば、非物質的なる勤勞をも亦年々の生産物に加ふべきであつて、單にその效用が前者に於ては永續的 (*durable*) のものであり、後者に於ては消滅し易き (*perishable*) のものであると云ふ理由によりて、勤勞をこれより除外する事は不合理である、斯くて J. B. Say が貨物と勤勞との二者を、共に年々の生産物の中に包含せしめし以來は、年々の生産物は一般に「貨物并に勤勞」 (*Services as well as commodities*) よりなると見做されてゐる、と云ふのである。こは前掲の二著書に涉つて彼の主張するところである。⁽¹⁴⁾

(C) 次に、富は、上述の貨物とか勤勞とか云ふ外界のものそれ自身ではなくて、此等のものより人が享受する内界の状態でなければならぬとする彼の理由、を述べるのであるが、これを二段に

(14) *Wealth* pp. 6-7. 及び *Theories of Production and Distribution* Chap. I. § 7
参照

分ち、いには斯る外界のものはそれ自身經濟學の主題たる富とはなり得ないと云ふ理由、(ろ)には此主題たる富は之等のものより人々が享受する内界の状態でなければならぬと云ふ理由とに分つて論述しやう。

(い) 先づ外界のものをそれ自身を以て、斯學の主題たる富とすることの不可能なることより述べんに、外界のものを以て此富とせんとすれば、上述せしところにより、それは一定期間に於て生産又は取得せられたる貨物并に勤勞、又は年々の生産物でなければならぬ。今一層正確を期して、同一物を二重に數ふことを避けんとすれば、これは更に純生産物(net product)とせらるべきである。(イ) 然し外界のものの即ち純生産物それ自身を以て斯學の主題とする時は、これを生産者の側より見て、『生産物』と定義するも、又は被分配者の側より『所得』と定義するも、事實上之を限定すると云ふことはなし能はないのである。即ち之を生産者の立場より見て『純生産物』と定義するときは、事實純生産と總生産物とを區別する事が不可能であり、従つて事實上に於て、斯學の主題を限定する事が出来ぬこととなるのである。此困難を避けんとしてこの純生産物を被分配者の側より見て『所得』と定義し、此を以て斯學の主題を限定せんとする學者もあつた。即ち各個人の實際上の貨幣所得と、之に算入せられざる、總べての經濟的なる勞働及貨物の貨幣評價格を、直接に、考察することによりて、純生産物を、その貨幣價格に於て捕捉せんとするのである。然し我々は到底この貨幣價格の評量のみによりては満足することは出来ないのである。何となれば茲に於ては、その購買力なるものが更に問題となつてきて、歸するところ我々は、實質所得又は純生産物をやはり取り扱はねばならぬ事となるからである。斯くして外界のものは又は純生産物そのもの

のを以て富とせんとする時は、結局之を限定する事が出来なくなると云ふのである。(ロ)加之彼は更に進んで、かくの如くすることによつては、斯學の主題たる富を比較計量する事が不可能になると云ふのである。即ち前述せし如く、經濟學者のなす論述は、多く富の増加減少と云ふ事に關して居るのであるが、『生産物』や『貨幣所得』と云ふことを以て斯學の主題たる富を定義しては、到底富の量を比較計量する事は出来ない。何となれば、先づ異なる種類の生産物の集團の間に於て、其量を比較し能はざる事は勿論である、例ば麵包一塊、牛肉一斤、ビール一本より成る生産物の一團と、麵包二塊、果物一個、バター一罐、よりなる生産物の一團とを、比較することは、困難である。次に、然らば生産物の分量によることなく、その價格によつてすれば如何と云ふに、それが同時且同場所にある生産物の集團の間に於てにあらざる限りは、假令如何なるものを以てその價值標準とするも、この價值標準はその異なる物の集團の間に於て同一の意味を有する事を得ないから、この比較評量もまた、同じく無意義となるといふのである。⁽¹⁷⁾

以上の理由により彼は外界の物そのものを以て斯學の主題とする事は、それを『生産物』と定義するも、亦『所得』と定義するも、總て不可なりとするのである。茲に於て我々は、外界のもの以外のものを以て斯學の主題たる『富』とせざる可らざる事となつたのである。然らばこれは何ぞやと云へば、彼はそは是等人間の外界にあるものが人間に與ふる結果、即ちSatisfactionでなければならぬと、主張するのである。以下進んで此點を明かにしやう。

(ろ)彼は『富』の物體性につきて the subject matter of economics has become utility or satisfaction

(16) Wealth. p. 3.

(17) Wealth. pp. 10-11.

minus disutility or dissatisfaction と結論して居る。此が彼の『富』の概念の主観化であるが⁽¹⁸⁾以下是に對して彼の其理由とするところ、及びこの意味を明かにしやう。

先づ彼が其理由とするところを分けて述べれば、次の如くである。

(イ) 先經濟學の研究の眞の目的より、するのである。即ち、彼の語を以てすれば、我々が經濟學の研究によつて眞に知らんとしているところのものは、貨物又は勤勞そのもの、分量ではなくして、貨物及勤勞がそを得たる人に與ふる良き結果の尺度である。即ち或金額の所得、又は或貨物及勤勞より成る所得を有する或個人又は人の集團と、他の斯る所得を有する他の個人又は人の集團との生計(Well off)を比較し知らんとしてゐるのであると云ふことは次第に明になつて來た、と云ふのである。⁽¹⁹⁾此事は甚面白い考へ方であると思ふ。“Wealth”の序の冒頭の語を見れば、此點に關する彼の眞意が一層明かとなる。そこに彼は以下の如くに云うてゐる。即ち經濟學の眞に根本的な問題は、我々の總べてが全體として、現にあるが如き生計(Well off or ill off)をしてゐるのは何故なるか、又我々の中の或者は平均よりも遙に豊かな生計をなし、他の者は平均よりも遙に貧しき生計をなして居るのは何故なるかと云ふ事である、と云うてゐる。

(ロ) 加之最近經濟學の研究によつて效用又は享樂遞減の事實、即ち人が享受によつて得る效果は、享受せらるゝ貨物、又は勤勞の分量に比例するものでない、と云ふ事實が、闡明せられて來たと云ふのである。

(ハ) 此二つの事實の明となりし結果、最近四十年間に於ては、經濟學者は、一般に、貨物及び勤

(18) Wealth. p. 13.

(19) Wealth. p. 11.

勞の、所持、使用、及消費の終局の結果に向つて益々論究を進むるに至り、而して之等の貨物及勤勞を、それ自身目的であると考ふるよりは、むしろ或目的に對する手段である (as the means to an end rather than an end in itself) と考ふるに至つた、斯くして從來は全然外物又は或行爲にのみ注意を向けたるに反し、今や我々は外物より享くる utility or satisfaction に重きを置くに至つたと云ふてゐる。⁽²⁰⁾

(二)更に十八世紀の初期より始まりし文學及政治上に於ける民主的傾向は積極的の utility or satisfaction の作出に伴ふ苦痛及困難を考慮に入るゝに至らしめた。⁽²¹⁾即ちアダム・スミス以前の多くの經濟學者は、又其後に於ても或る者は、國民の利益を考ふるに勞働者階級の利益を除外したのである、然るに生産に伴ふ苦痛なるものは此階級の者に主として落ちるのであるから、之等の經濟學者は、富の獲得に伴ふ苦痛を全く考慮に入れなかつたのである。然るに此民主的傾向の結果、近來の多くの經濟學者は、人々の經濟狀態を考ふるに、之等の苦痛をも考へに入れるに至つた。例は、こゝに同量の満足を享受しつゝある二人の勞働者があつて、一人はこの満足を得る爲に、一日十時間働き、他の一人は十六時間働いてゐるとすれば、前者の經濟狀態を、後者のそれよりも優されりとするのである。と云ふてゐる。⁽²²⁾

ホズクの如くにして今や經濟學の主題は utility or satisfaction minus disutility or dissatisfaction となつたと云ふのである。⁽²³⁾

以上の理由により、彼は、彼獨特なる富の概念に到達したるが、『斯くの如くにして若し尙富なる語を斯學の主題を示す爲めの簡にして要を得たる表示として保持するならば、富なる語は人間

(20) Wealth. p. 12.

(21) Wealth. p. 12.

(22) Wealth. pp. 12-12

(23) Wealth p. 13.

の或狀態又は有様を意味したる古き意味に還つたものであると考へなければならぬ⁽²⁴⁾。即ちかくて彼は『富』を本源的の意味に還し、人間の或狀態又は有様と云ふ主觀的のものとしたのである。

以上余は、彼が獨特なる『富』の主觀化を主張する理由を明にしたから、次にはその概念の意味を明にせんか爲に、余が以上英語のまゝに用ひ來りし *utility* or *Satisfaction* と云ふ語義について少しく述べる。前述せし如く彼が茲に *utility* と云へるは、普通我々が效用と譯して、外界の物の人に役立つ性質を意味すとなすところのものと異つてゐて、彼が *satisfaction* と云へるものと同様なのである。即彼が此兩語により意味せんとするところのものは、外界のもの即ち *Commodities* (貨物)並に *Services* (勤勞)の享樂によりて人に與へられたる快樂等の好ましき作用であり、而して其作用は特に人の心の上に及す作用を意味せんとするものであると云ふことは、この結論の理由として彼が以上述べたところ、及び本論の終の方、并に本書の他の部分に於て明かである。同様にしてまた彼が *disutility* 又は *dissatisfaction* と云へるものも、以上の如き *utility* 又は *Satisfaction* を得るに伴ふて、人間の受くる苦痛及困難即 *The pain and srtsome toil involved in the creation of positive utility or satisfaction* であると云ふこと并にそれには同じく人の心へ及す作用が、重く考へられてゐると云ふ事が、明かである。彼が斯く富の概念に於て満足及苦痛と云ふ心的作用を重ずると云ふことに關しては、後に又説く事として、茲には一先づ之で止めて置く。

茲に於て、『Something possessed or enjoyed by human beings』である彼の『富』の概念の物體性即『Something possessed or enjoyed』も略明にされたと思ふ。即(A)に於てそは或期間に

(24) *Wealth*, p. 13.

關するものである事を述べ、(B)に於て此『富』たる utility or Satisfaction の means (手段) なるものは貨物 (Commodities) のみならず、勤勞 (Service) をも含むべき事を明かにし、(C)に於て即ち今また此『富』は之等貨物及勞働より人間が得る満足よりその調達に伴ふて人が受ける苦痛を控除したものでなければならぬ事を明かにしたのである。

なほ彼の富の概念の主格即ち 'human beings' と云ふ事に就いては既に最初に於て明かにして置いたのである。

依つて茲に彼の『富』の概念に對する眞意を一括して云へば、次の如くなる。

『それが社會全體としての人間にせよ、又は個人としての人間にせよ、又は階級としての人間にせよ、兎に角、或人間の或期間内に於ける富とは、其人間が、其期間内に於て、貨物及び勤勞から享受したる満足より、其人間が、其期間内に於て、かゝる積極的満足を得る爲に受けたる消極的満足即ち苦痛を控除したものである』。かくて自己の『富』は、自己の得たる、斯かる満足より斯かる満足を得る爲に自己が受けたる苦痛を、控除せしものであるが如く、國民全體の『富』は、國民全體の得たる、斯かる満足より斯かる満足を得る爲に國民全體が受けたる苦痛を、控除したものである階級の富についても同様である。

彼の『富』の概念は、經濟學の研究主題としての富の概念である。故に『富』の概念に對す此彼獨特の結論殊に『富』の主觀化は、直に彼の經濟原論及其他の彼の學說に重大なる影響を及し、それ等のものに、同じく彼獨特なる色彩を與ふる源泉となるのである。余は進んでこの點に論及し併せて、一層彼の富の概念を明にしようと思ふ。(未了)